

イタリア ピストイア市

The city of Pistoia, Italy

ポイント
押さえておきたい

1. イタリア：自治体主導

■3歳～5歳の幼児教育の場合は国の管轄による幼児学校、0歳～2歳は自治体の管轄の保育園だが、どちらも自治体の裁量が大変大きい。地域の特性に合わせた教育ができる反面、自治体の財源や政策によって地域格差が大変大きい。

■子どもの社会化と親の孤立防止を目的とした施設として、18か～36か月児対象の「子ども空間」(spazio bambini)と3歳未満児とその親のための「親子センター」(Centro per bambini e genitori)がある。

2. イタリア：全国自治体間ネットワークによる家庭支援推進へのアクション

「0～6空間」という自治体間の全国ネットワークは、福祉と教育の統合的な支援として、子どもと家族の社会化と居場所作りを推進中。増加した移民家庭と貧困家庭の親子の参加を促している。

3. ピストイア市：0歳～5歳の一貫した教育理念と実践

日常生活全体がホリスティックな教育の場。0歳から就学前までの連続した理念の教育体制。観察を基に、子どもが好奇心、探求心、感情、社会性、創造性を発揮できる環境をつくる。美に触れることは、心の安定、他者となつたりたい気持ち、探求心を生む内的な力として、美的な環境整備を重視する。子ども同士、大人と子ども、大人同士の関係を尊重。施設には責任者が存在せず、全職員の協働体制を市の教育コーディネーターが支えて、実践研究を進展させている。

4. ピストイア市：ドキュメンテーションと現職研究

教師(乳児保育所の教育職員は幼児学校教育の資格も持っており、教師の呼称)の専門職としてのアイデンティティと職能向上を重視。ドキュメンテーションは、保護者との情報共有のみならず、教師の個人および協働の省察、教育計画の作成と改善、当事者評価に用いられる。現職研修の機会が多く、教育コーディネーターが現場に根付いた多様な機会を設定。市民に開かれた教育施設として、家族・市民とともに子どもの成長を支える体制で、保育評価にも全関係者が参加。

	0歳～2歳	3歳～5歳
基本的制度	<ul style="list-style-type: none"> 国の制度：乳児保育所(Nido dell'infanzia)。自治体の管轄。0歳～2歳児を受け入れる。自治体立、国立、私立があり、自治体立と国立の乳児保育所は、3歳以降の幼児学校と統合的なシステムを作っていることが多い。 ピストイア市立乳児保育所：0歳～2歳。乳幼児教育局が乳児保育所と幼児学校を一括管理。親の労務などで子どもための教育機関と位置づけ、教育とケアの統合的な教育を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 国の制度：幼児学校 (Scuola dell'infanzia)。教育省の管轄。3歳～5歳児を受け入れる。国立、自治体立、私立制(週40時間)、半日制(週25時間)がある。国の大枠のなかで自治体の裁量が大変大きい。地方分権型で、運営上の制度は自治体により異なる。地方による質の差が大きい。幼児学校の前段階として2歳児クラス(sezione primavera)がある。 ピストイア市の制度：幼児学校は3歳～5歳児を受け入れる。保育園との統合的な制度により、0歳から就学前までの一貫した統合的な、小学校教育準備でない教育を行う。 義務教育開始：6歳。
子ども親、保育親	<ul style="list-style-type: none"> 市の教育憲章は、能動的な子ども親とホリスティックな教育観を謳っている。 子ども親：有能で周囲の世界や人々と積極的に対話し、主体的な市民としてのアイデンティティをもっている子ども。 保育親：施設は子どもの成長とウェルビーイングを促す生活の場。好奇心や探究心、同僚との能動的な関係、大人との対話・大人による聴き取り、子どもの認知・情緒・社会性・自己・美的感覚等全面発達を重視される。 	<ul style="list-style-type: none"> 国の指針：ナショナルカリキュラムが大きな枠組みとしてあるが、実施の仕方は自治体が決める。5領域(自己と他者・身体と運動・イメージ・音・色・会話)とど「世界を知る」。教育とケアの統合、遊びと環境の探索を通しての学習、美への配慮、ゆったりの時間配置、子どもの自主性と教師の観察と観察等、先進的な自治体の取り組みに添った形に改訂された。市民性の教育の重視。 ピストイア市の指針：市の教育憲章を基本に、各学校で現場に合わせて教師がカリキュラムを作成。 保育の評価：第三者評価や客観的評価でなく、職員の当事者評価(職員、コーディネーター、親、行政、時には市民)による協議、その公開。
国・自治体の指針・評価	<ul style="list-style-type: none"> 国の指針：ナショナルカリキュラムなし。 ピストイア市の方針：市の教育憲章(理念)を基本に、各園の職員が現場に合わせて大枠のプロジェクトを作るが、子どもの関心に合わせて柔軟に作る。 保育の評価：第三者評価や客観的評価でなく、職員の当事者評価(職員、コーディネーター、親、行政、時には市民)による協議、その公開。 	<ul style="list-style-type: none"> 国の指針：ナショナルカリキュラムが大きな枠組みとしてあるが、実施の仕方は自治体が決める。5領域(自己と他者・身体と運動・イメージ・音・色・会話)とど「世界を知る」。教育とケアの統合、遊びと環境の探索を通しての学習、美への配慮、ゆったりの時間配置、子どもの自主性と教師の観察と観察等、先進的な自治体の取り組みに添った形に改訂された。市民性の教育の重視。 ピストイア市の指針：市の教育憲章を基本に、各学校で現場に合わせて教師がカリキュラムを作成。 保育の評価：第三者評価や客観的評価でなく、職員の当事者評価と関係者(職員、コーディネーター、親、行政)による協議、その公開。
理念・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 理念：基本は子どもが心地よい生活を送ること。教師の協議による保育。 プログラム：子どもの観察から作成。心地よい環境、美的な環境が心の安定、他者の尊重等を生む。継続性、個と協働。教材のユニークさ。教育とケアの統合は昼食時間等生活リズムにも。 特徴：日常生活の中に教育の素材と方法を見つける。 	<ul style="list-style-type: none"> 理念：主体的な市民としての子ども、子ども同士の関係を重視。 プログラム：学校独自のテーマ(自然、地域、物語等)を土台に、子どもの観察から年間を通し柔軟にテーマ(5領域が含まれる)を作成。豊かな環境構成と多様な素材、教材を用意。「審美的」の言葉で教育の根幹の一つとして、美に触れる環境で子どもの心地よさの保障と美への欲求の育成。子どもの自発的な遊び活動の教育的な重要性の認識。

評価できる点	課題	日本への示唆
<ul style="list-style-type: none"> ■監督行政の規模であり、また教育コーディネーターが行政と保育の現場の調整を行うので、現場の意見が行政に反映しやすい、改善が迅速にされる。 ■0歳～5歳の教育の連続性と統一性が確保されている。 ■地域の特性や実情に合わせた保育が作りやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ■自治体の裁量が大変大きいことは、地域の格差を生む。財政基盤の弱い自治体、社会経済的に困難な家庭の多い自治体、住民の乳幼児教育への関心が高い地域は、乳幼児教育の発展が早い。 ■自治体間ネットワークでの相互支援の効果が期待される。 	<ul style="list-style-type: none"> ■子どもは重要な市民であるという認識のもと、乳幼児教育が市政で重要な課題の一つと位置づけられていること。 ■0歳～5歳の連続性のある教育の作り方。 ■責任体制重視よりも、教師間の協働による合意に基づく保育。 ■教育コーディネーターの存在。
<ul style="list-style-type: none"> ■認知・非認知、社会性、市民性を育てる全人格的教育、子どもが自ら育つための探求心、好奇心を重視する点。 	<ul style="list-style-type: none"> ■研修による教師の資質確保と行政との連携が必要。 ■国の指針は先進的な自治体の指針をもとに作られているが、脆弱な自治体にも適用するか。 	<ul style="list-style-type: none"> ■遊びや環境重視の考えは日本と共通する点がある。その上で、生涯にわたる全人格的発達土台としての幼児教育、学校の準備でない幼児期の教育を考えたことできる。 ■指針が上からではなく、現場の教師が自分たちで経験に合わせて作ることで、教師の力量を高めるためにも有効。
<ul style="list-style-type: none"> ■上からの指針ではなく、子どもの観察に基づいて、子どもたちの興味や発達についての教師間の話し合いによって柔軟にカリキュラムが作られている。 ■子どもの教育と発達のための評価に働いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ■保育の主体は子どもであること共通認識のもとに、子どもを観察して興味や情緒を把握することが保育の基本だということ。 ■特に美的環境の重要性が通用しなってきた。民族、文化、社会経済的条件の多様性に対して対応し、どう保育にプラスに反映させるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ■各国が子どもの観察をもとにプログラムを作る。 ■子どもの心の安定を教師の接し方だけに頼らず環境構成を通じて可視化している。 ■「環境による教育」「遊びによる教育」「美の教育」の意味を汲み取ることができている。
<ul style="list-style-type: none"> ■保育の主体は子どもであること共通認識のもとに、子どもを観察して興味や情緒を把握することが保育の基本だということ。 ■特に美的環境の重要性が通用しなってきた。民族、文化、社会経済的条件の多様性に対して対応し、どう保育にプラスに反映させるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ■小グループ活動が多いので、教員数の確保が必要。 ■戸外活動が多いが、運動的な活動は比較的少ない。 ■乳児保育所では大きい遊び道具がやや少ない。 ■幼児学校では5領域を満遍なく扱う考えではなく、担任教師によって活動にかなりの違いがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■集団活動について、一斉に皆同じことをするのではなく、個人の興味や他児に共有されるのが繋がって集団活動になるという考え。 ■1クラスの子ども数は日本と比べて少なくないが、小グループで教師一人の編成が、落ち着いた様子で子ども同士の関係を作る。 ■子どもと物、現象も教育の素材となる。ただし、子どもが手に取りたいような手入れと配置に考慮する。
<ul style="list-style-type: none"> ■余裕のあるシンプルな時間構成。 ■0歳から5歳まで同じ生活のリズムは子どもにとってわかりやすく、学年度始めもリズムは安定している。 	<ul style="list-style-type: none"> ■余剰のあるシンプルな時間構成。 ■0歳から5歳まで同じ生活のリズムは子どもにとってわかりやすく、学年度始めもリズムは安定している。 	<ul style="list-style-type: none"> ■日本から見ると活動別の多くの部屋が必要。 ■時間区分がかなりゆるい。
<ul style="list-style-type: none"> ■教師の子どもに対するような距離感、介入しすぎない支え。 ■担当教師がもたらが得意で、子どもの個性を大がかりに理解し長期に伸ばしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ■教師の子どもに対するような距離感、介入しすぎない支え。 ■担当教師がもたらが得意で、子どもの個性を大がかりに理解し長期に伸ばしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ■教師が子どもにいつの間にか関わらざるを得ず比較的材料になる。 ■子どもが園の主人公であることの再認識。
<ul style="list-style-type: none"> ■それぞれが自分のペースで生活しながら仲間と関わりやすい環境設定。落ち着いた協働的な関係が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ■移住者の増加によって、従来のイタリアの家族の価値観が通用しなくなった。民族、文化、社会経済的条件の多様性に対して対応し、どう保育にプラスに反映させるか。 	<ul style="list-style-type: none"> ■子どもの大声や取り合い、しやがせ等は何に影響されるのか考え比較材料となる。
<ul style="list-style-type: none"> ■親、祖父母、市民も施設での教育に関わる主体として考えられている。 ■外国をルーツに移住家庭の統合に積極的である。 	<ul style="list-style-type: none"> ■親、祖父母、市民も施設での教育に関わる主体として考えられている。 ■外国をルーツに移住家庭の統合に積極的である。 	<ul style="list-style-type: none"> ■親も市民も教育のパートナーと位置づけられ、良好な協力関係と積極的な参加が図られている点。
<ul style="list-style-type: none"> ■幼保の職員資格が同じで階層がない。幼児期の移動がなく、0歳～5歳のすべてを見送せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■幼保の職員資格が同じで階層がない。幼児期の移動がなく、0歳～5歳のすべてを見送せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■4年制大学における幼稚園教諭と保育士資格、「保育教諭」資格への示唆。
<ul style="list-style-type: none"> ■始と保の職員の間にヒエラルキーがない。ゆたかに労働時間。そのなかでの研修時間の確保。 	<ul style="list-style-type: none"> ■始と保の職員の間にヒエラルキーがない。ゆたかに労働時間。そのなかでの研修時間の確保。 	<ul style="list-style-type: none"> ■始保の同等の特遇と研修も含む労働条件は、乳児保育所職員の意識が高く、保育の質を向上させ、離職を減らすことが可能。
<ul style="list-style-type: none"> ■研修のための時間一人当たり年間約150時間。 ■研修は教育コーディネーターが中心となり企画。 ■職員の職場内研修(学年単位および全職員)も市合同研修も実施。 ■協保の共同研修で理念の一致を確認。現場教師と教育コーディネーターの協力体制で、現場から研修テーマを出す。週記録(週誌)の利用と改良についての園間共同研修もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■自己研修の十分な時間の確保。研修によって自己開発が可能。教育職員でない職員(調理師、清掃員)も職場内会議と研修に参加できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■研修機会が多。現場と企画者の協働によるテーマ設定。教師の関心や伸びる職能開発等研修企画のやり方。
<ul style="list-style-type: none"> ■子どもについての評価 	<ul style="list-style-type: none"> ■子ども個人の評価は記録。保育の改善に直結させている点。 	<ul style="list-style-type: none"> ■子どもについての評価ではなく、保育についての教師の協働による自己評価は意欲を高める実践の向上に役立つ。 ■保育に即した外部評価も数値による評価もない。市行政も親も教育の当事者という考えから、施設とも話し合いによる。

イタリア ピストイア市

The city of Pistoia, Italy

	0歳～2歳	3歳～5歳	
保育者の形・保育料	<ul style="list-style-type: none"> ■保育者1人当たりの子ども数：0歳は5人、1歳～2歳は7人、2歳～3歳は9人。 ■クラスサイズ：0歳は10人～15人、1歳は14人～21人、2歳は18人～36人。異年齢保育の園もある。 ■子ども主導が可能空間：活動別教材、素材が豊富に揃った部屋やコーナー、その中での自由遊び、創造的な素材が豊富にある。 ■保育料：親の収入(12段階)と保育時間(3段階)によって決定される。最少月20€～最高月520€。 	<ul style="list-style-type: none"> ■クラスサイズ：18人～36人。教師は3人～4人。 ■小グループ教育活動：教師が子どもの行動・発達の観察から、子どもの関心をもとにテーマを設定。一定の場と素材の範囲で子どもは自由に遊ぶ。表現活動が多い。 ■保育者の形の特徴：●学校、学年ごと大きなテーマに基づくプロジェクト。●素材別活動別の空間を用意され、創造的な素材が豊富にある。0歳から5歳までの教育の連続性を踏まえ、一貫して同様の素材がある。 ■保育料：幼児学校は無償。 	
一日の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ■開設時間：7時30分～15時30分の間と7時30分～18時の間がある。 ■一日の流れ：9時30分～朝の小グループ活動→12時～昼食→午後(午睡の子はやつて食べてから帰宅)。縦割りが多い一日。外遊びの時間も長い。 	<ul style="list-style-type: none"> ■開設時間：8時30分～午後。年3回開設。 ■一日の流れ：9時30分～朝の小グループ活動→12時～昼食→帰宅(午睡の子はやつて食べてから帰宅)。縦割りが多い一日。 	
保育者と子どものかわり	<ul style="list-style-type: none"> ■保育者は保育者と子どもの協働で創るという基本的な考えに基づき、子ども主体で教師が寄り添う関係。 ■小グループでは大人と子どもの心理的距離は近いが、大人からの介入はタイミングを見逃さない。 ■身体接触よりこぼれやひらき、穏やかな表情、静かな声とつながりあうかわり。 ■保育者の担当は基本的に3年間持ち上がり。 ■教師は子どもを観察、記録し、計画やドキュメンテーションを作成。 	<ul style="list-style-type: none"> ■教師の子どもに対するような距離感、介入しすぎない支え。 ■担当教師がもたらが得意で、子どもの個性を大がかりに理解し長期に伸ばしている。 	
子ども同士のかわり	<ul style="list-style-type: none"> ■活動目的別の部屋での、7人～10人程度のグループ活動が多い。しかし集団で同じことをするという考えではなく、同じ部屋あるいは同じ探検のなかで、子ども個人の行動に大きな自由がある。したがって、自発的な子ども同士の協働が生まれやすい。 ■穏やかな社会的雰囲気を用意することで、子ども同士の協力的な関係性を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> ■それぞれが自分のペースで生活しながら仲間と関わりやすい環境設定。落ち着いた協働的な関係が多い。 	
園と親・家庭とのかわり	<ul style="list-style-type: none"> ■市は、子どもは独立した市民という意識を市民に浸透させる努力も。幼児が市民と接触する機会をもつ。 ■親と保育者の協力は保育の要である相互理解を深めることを重視。親や祖父母、異文化を背景にもつ家族の参加を積極的に進める。 ■家業と施設の問題が起きると、教育コーディネーターが対応。 ■親も職員研修に参加できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■親、祖父母、市民も施設での教育に関わる主体として考えられている。 ■外国をルーツに移住家庭の統合に積極的である。 	<ul style="list-style-type: none"> ■親も市民も教育のパートナーと位置づけられ、良好な協力関係と積極的な参加が図られている点。
保育者養成	<ul style="list-style-type: none"> ■国の制度：乳児保育所教員資格は保育士(educatore)で、養成学校での2年間の養成。幼児学校教員資格は教諭(Insegnante)で、大学4年間の養成。 ■ピストイア市の制度：4年制大学卒で保育士と幼児学校教諭の両方の資格をもつ条件で採用。したがって乳児保育所教員も教諭(Insegnante)。 	<ul style="list-style-type: none"> ■幼保の職員資格が同じで階層がない。幼児期の移動がなく、0歳～5歳のすべてを見送せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■4年制大学における幼稚園教諭と保育士資格、「保育教諭」資格への示唆。
保育者の労働条件	<ul style="list-style-type: none"> ■施設責任者は存在せず、職員の協働で運営。教育コーディネーター(市職員)が、職員の支え、親と園の連携支援、行政との媒介、研修の組織化、園間のネットワーク作り等調整の役割を果たす。 ■給与：初任者が月約1,400€。 ■労働時間：乳児保育所教師も幼児学校教師も同じ待遇(小学校教師並み)。子どもと接する時間週30時間。他に研修および家庭と接する時間年間150時間。 	<ul style="list-style-type: none"> ■始と保の職員の間にヒエラルキーがない。ゆたかに労働時間。そのなかでの研修時間の確保。 	<ul style="list-style-type: none"> ■始保の同等の特遇と研修も含む労働条件は、乳児保育所職員の意識が高く、保育の質を向上させ、離職を減らすことが可能。
保育者研修	<ul style="list-style-type: none"> ■研修のための時間一人当たり年間約150時間。 ■研修は教育コーディネーターが中心となり企画。 ■職員の職場内研修(学年単位および全職員)も市合同研修も実施。 ■協保の共同研修で理念の一致を確認。現場教師と教育コーディネーターの協力体制で、現場から研修テーマを出す。週記録(週誌)の利用と改良についての園間共同研修もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■自己研修の十分な時間の確保。研修によって自己開発が可能。教育職員でない職員(調理師、清掃員)も職場内会議と研修に参加できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■研修機会が多。現場と企画者の協働によるテーマ設定。教師の関心や伸びる職能開発等研修企画のやり方。
子どもについての評価	<ul style="list-style-type: none"> ■評価はなし。観察、ドキュメンテーション、ポートフォリオで子どもの記録をする。小学校への情報提供にも使用。 	<ul style="list-style-type: none"> ■子ども個人の評価は記録。保育の改善に直結させている点。 	<ul style="list-style-type: none"> ■子どもについての評価ではなく、保育についての教師の協働による自己評価は意欲を高める実践の向上に役立つ。 ■保育に即した外部評価も数値による評価もない。市行政も親も教育の当事者という考えから、施設とも話し合いによる。